



小栗外傳

五

~13
3919
5



門へ13
號 3919
巻 5

寒燈夜話 小栗外傳 卷之五

東都

絳山歌醜陳人戲編

第九編

貞婦夫婿を待つ節を全き
良馬名士小達て能を顯と



且説其時一人の了鬘歩もて這裡に入らせり人と助守をくまど取て
おくまのうられ知も誘ふお六十餘りの老女待らけて恭しく礼を御君の
み忘れやあまあらめ焼の庄司が母あてはりぬ何よりいふ急な光景
か母あ差つがれば大に敬られたるも奈何と思ひきや此處あしき
逢ふと河邊の城爾ふ審まらぬ道理あり是れあはれ縁故
のり何ぞ前中出んと思ひまらぬはが先づへとをり人の

小栗外傳 卷之五

此家の姫こそ君と許家あるも照天姫あておつとて姫君不圖も今日
君をえまひ強て此家よ誘ひまへつとて父へ知れし助を再火發る友
あて城をえらぐにいと怪しとてお母照天の家ありといひさつて不審
暗ざらんとて其故より致せし後眉を疲めて同るれ城の噴嚏つ
語出づれば姫君此地方へつこりありして前年名武のい家亡び
まひ折うら姫君の叔父君横山を郎安秀との侍従君と姫君と
付ひ鼓をえ退りし下を吟呻はるが横山及若りし附五人の男子
を指しお没落の苗附乳人お誘ひ行忠知れどおりしが五人の男子成
人の后方のうらねきまうに緑林の群入り終お賊の大羽軍とあり
此地方お餘と居りお安秀とのことを知り尋ねて来らておられぬ
頼と終り奴子六人白波の棟梁していと豊お世を送りぬ五人の男子

といひ嫡男を郎安後二男と次郎安春三男と三郎安武四男を四郎
安高五男と五郎安永といひ渾力量早業の悪徒と然るおを郎安後
次郎安春の二人姫君お越想し足争うて悪とするおそ父の横山これを
えて心裡おおりのやう名武が家のこと然るお死人を照天お配遇ハ家名
を再與しおんと濃念との命のほ様で一色の云はるるおおのよしを
我見照天を悪とするを幸なる一人の子をりて照天と夫婦は名武の
家を再無し旧領を復しるべしとて樂からんと想下しけ姫君お祝
子と斯と知しすおわじしればお親子とこのおはせしめいとあら憂
るおおほしからせまひおまことといひ逃去一日とておあうち侍従
君のおすりおこれを苦し病まひ終りておおろおろお多しぬその後を
姫君おせおれなくお涙の乾くひまもななくおらとて横山安秀及多しお

尉心の只顧我子と誓縁のこゝを劫とて姫ハ堅く辞多入り。されども安
 秀とて心まきで。密々よを郎安繼をりて女婿よせん。後れば二郎安まき足と
 忍之身とりて娶んとされば兄姫みほとく闘争にもあうびねるう
 えのうふ父の横山もこゝを秋心ひ誓対誓縁の沙汰止まね。再ハあれ
 ど終るも我子のうら一人を照天ハ娶せ名武の家を押領せんと想
 公頼あれ免角ハ姫君の公ととり。新婦おせせや。といろくに愛恤
 ま後ハ。姫の宜のこゝを何事にても。その云ハあくなきおね
 くれ恩を負せて其子と誓縁さそえぬるあり。姫君ハあまき精し
 唯針の蕊よ叶さるごとく。此うちふ君のハ在家を尋ひ。此地方を
 逃れ出のりんとおぼせ。ハ使を養ふ人もなく。自ら出のりんハ深窓お
 生まらるハ世間のうら。東街西街どお知し。あまき。ハ念トあのみ

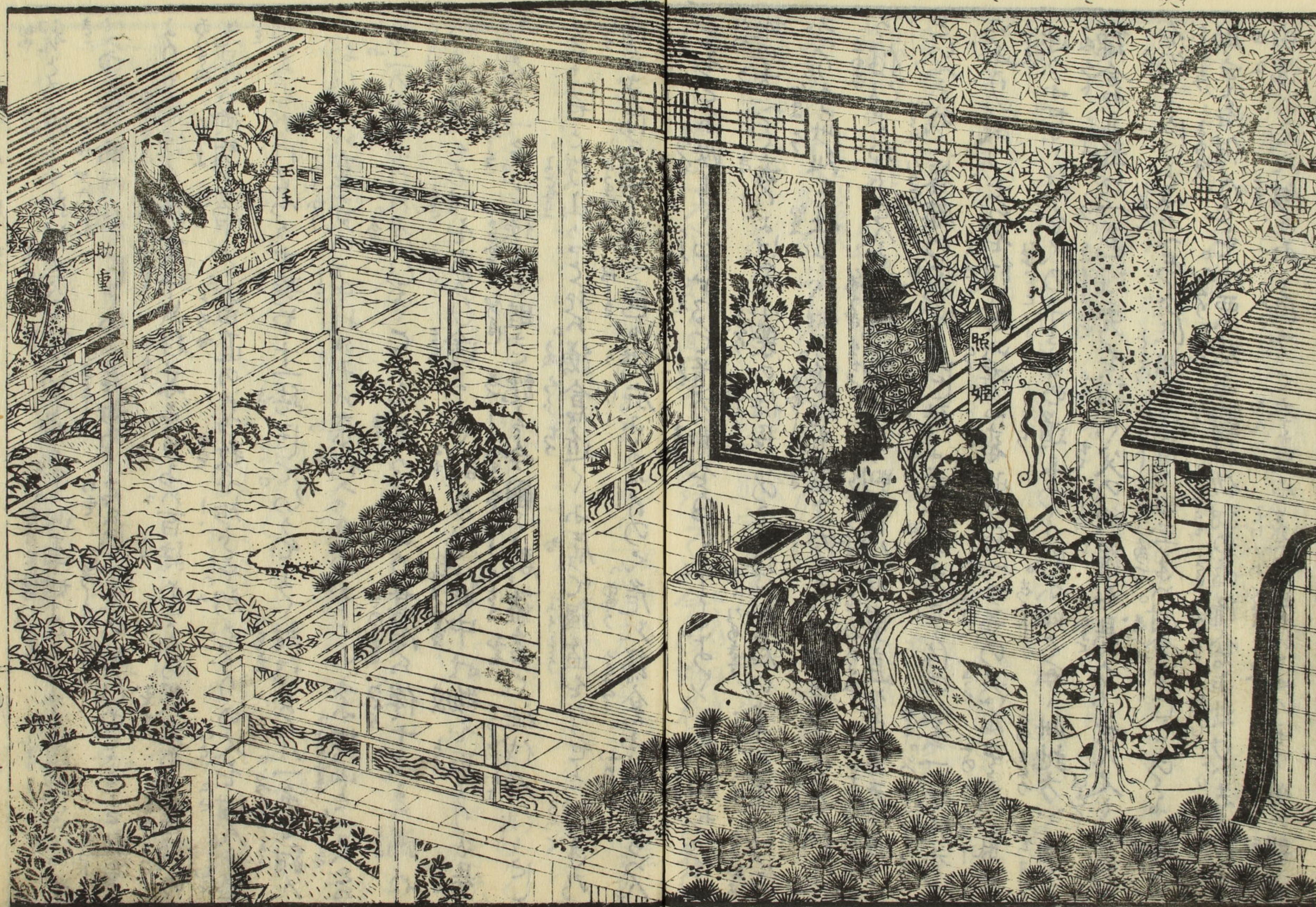
あていと患ひ屋ハあ折ら。焼鎌倉ハ所用ありてまわりはるふ
 道を過失の処ハ吟呻ひ。此家ハ一夜の宿り。奴をぬふ。其夜姫君
 のハ前ハあまき。ハ事ハ。あまら。焼が。奴の。人。の。こ。こ。へ。あ。げ
 ぶ。り。が。既ハ。前。を。退。出。臥。ふ。入。く。睡。よ。つ。ん。と。ま。る。と。れ。姫。君
 忍中ハ只一人焼が枕辺ハあ。ハ。奴。ハ。助。重。君。と。許。家。あり。照。天
 なり。汝ハ我まハ由緒ある人か。夫ハ在家を知らし。今ハ
 密々よ誘引はる。と命あり。と。妻。氣。落。城。の。後。ハ。ハ。在。家。を
 知り。ち。も。移。が。其。の。の。れ。ま。に。告。ま。わ。じ。と。わ。が。さ。あ。ら。今。より
 此ハ。居。て。奴。家。ハ。力。ハ。添。て。よ。と。ま。き。か。ら。命。の。乖。ハ。か。ま。ま。り
 姫君ハ給事ハ。名。を。玉。手。と。ま。れ。三。夜。ハ。側。ハ。侍。り。ぬ。焼。が。心。ハ
 君のハ在家ハ。知。ら。ぬ。姫。を。使。ひ。ま。わ。り。ハ。夫。婦。の。ハ。対。面。あ。は。し。ハ

まんと只顧君の風声を窺ふ折ら。不料ろ姫君。君がえらけまひ
 とれと初らたゆえ多ひするのみなまはる人差のほらも是東あは
 明白其名多るものと強て此家が誘引宛をて其実否う代礼し。
 君があてあつたばえんまゝのひ此年迄の真愛告げも用もりのりん
 おぢめし。そのれ横山との常々殿のふをがぬく忌嫌への害心
 懐くと必定なまは此処へ誘引まぬじしほをが安秀どの入を包み
 のへ。このまらのををを會もひ今夜蜜は姫君おひんを承あり。
 尚委まはせしめせ。然れども只今もしとて横山とのへはほく
 多る今今対面ゆえん然るる後一人は此睡あひす。婿
 蜜お案内しつゝあつたばと故の別室お送り出で我子庄司お對
 面し小栗は父へあつたばを述ゆらる今夜姫君をおしとあは

さあとお汝よくをを道の衛をるるとよく、私語おひく
 姫の方へぞ去りよけし小栗の従臣このと我々姫君の事へ兼て及
 る。今此処は在と我知の勢付も置するはへはあつた奈何と
 う儲ひつゝあつたせんと経儀區なる。判官代助重直つとて天下度
 としへと我は容膝の家がゆは。殊よ天を共せむの能一色詮秀と
 りありのあり。それを討人と世所ふまはら一女子のふは志氣
 速くおせむれを人の子するの道おのれ不知ち此地方を去
 鎌倉お赴け一色詮秀を討と。父の徳羅を易くせん人くその公
 をおよりしと父へあつたば母庄司お母玉おへ時分はとあつたば
 助をを付んとと小栗お對ひ仇討のふ鎌倉お赴けは志にしも
 由豫とて付あつたばかて本意を遂目出た還るその付親と

小栗巻之五

助重
奇遇
做



五

小泉卷之五

五

四

親との許しつれ妹脊を結びとるべ。世奉姫よ又へよと道理をうけて
 せよとて、おんか 呪咳然として、おんか 君知らるるは、一色の勢ひのこゝと執事
 よりも尚坊の鎌倉中兵衛斗まらふ百騎あまりの従者の其鼓の
 先景の御新垣均く當直のみの教を知りて、おどろりの人を討人は鬼
 神もあれ、こゝろ十騎や十一騎して、いそよく討はるる一色を討ん
 とおぼさるる窟竟のふれ、その奈何なるものぞといふ、横山と一色と
 無二の交わらば、忍びくこゝろあまることあり、其相の俵十人よ満ね
 侍人なり。その肘を窺ひ、途よく討まり、袋中其物を取らるるも易
 かるべ。一色と横山と睦き、總今國々群盗多く、征伐及び、いじ
 とる、せと横山がこと、徳倉近くお居て強盗をなせと討まら
 向らば、正しく一色が、洪庇あよるもの之危れ、鎌倉へ赴き、あらん

あり、此地方に忍びて、姫君とよく議り、一色が、あつるを待て、復讐を
 と、誦められ、小栗少くを、勅く、十人の豪傑、おも玉、まが、ち、あ
 はり、し、ま、と、只、願、凍、勃、せ、の、助、重、実、り、と、思、ひ、人、く、の、誦、よ、従、ひ、り、
 娘、ハ、喜、び、い、ら、ら、ら、ら、遠、裏、よ、お、し、せ、よ、と、助、重、を、信、ひ、て、姫、の、圍、は、透、り、
 多、助、重、を、圍、中、に、入、り、て、その、光、景、派、ん、る、よ、多、く、れ、物、数、寄、お、匠、手、を
 三、じ、美、美、兼、あ、ら、ふ、空、煙、の、草、り、る、あ、ら、は、ひ、ひ、と、清、ら、う、お、借
 たる、文、机、は、姫、の、う、ち、り、れ、流、く、物、想、ひ、し、る、さ、ま、な、ら、も、目、今、助、重、の
 身、も、ふ、ら、ち、敬、う、れ、顧、る、光、景、の、眉、ハ、揚、柳、の、翠、を、欺、れ、影、ハ、芙蓉、乃
 花、中、好、ま、る、肌、を、雪、ふ、光、を、添、え、あ、が、こ、く、腰、を、結、ぶ、束、た、ら、ふ、似、り
 雲、間、を、ち、て、晴、出、る、月、も、尚、美、く、天、然、の、姿、色、概、本、あ、ら、も、い、ら、く
 あ、れ、な、比、せ、ん、や、正、足、蓬、萊、宮、裏、の、神、仙、は、あ、ら、は、も、か、ら、ら、と、瑤、臺

月下の仙女ありとほとほ石心鐵肝の助重も心魂天外に飛悦忽
 そと着とれり。其尉玉子の姫と對ひこの羊比咩とおぼと殿乃
 びとりの何れに念ひ終ひて隈なく女へあひて真愛の慰め
 多と後と銚子土器とり出でしぎまじりせと幼りねの助重照天と打
 りし心と某と某との親の免せ妹脊がが互の家の凶愛は結比
 間とらなりはほど姫の生死を知れぬが君くの羊子の預ぬ事とも
 他一女を親近せん是我父の命をさしておん身を忘れざる所し
 ちつるふ今夜不圖とあること正し是女婦の縁れにさる燈と
 ろふん。されば誓成做ともある妨あるまじけほど縁てゆめ及びひ
 るん某父満重の一色淫秀の誑よよして君の心勘氣成夢の夢
 の城おいて生害せり。然るに父の御まの一色うの今生一色成討く。

父の徳羅を易くせん。此所すてありはるふ其道はして姫と
 誓縁せん。と孝女ありと。此道理を聴てれ多く能を復て后誓を
 做もほくじ。某志氣の差りてはる前ふまじはるごとく化は成せ
 されをりて察し人のと理をそしてゆめねば姫と小栗がさる所赤公
 へて憐れ女へたれ。且喜び且嘆れ免自の回意成せり。しが想ひ
 まるせら横山安秀乃明日あも我子と誓縁させんと女へるが。うあせん
 と公若く。漫涙ゆかきくじが漸あつて云もをねら君は心氣
 の程まると小娘とも忝とも言語をれに述られ。君と女をが
 妹脊の間。ありまけ誓の比よりして親の許世縁故のまは父乃
 横死お家成て母とつららと夢幻と嘆れ悲しむ。叔父なりけね
 横山安秀奴系親をばひて。此地方に心ひ居るうち母の侍従を

嬖行名をたてんた。姫君と密議をとり。一色成討謀を倣ふふらと
 賢され尚足あてもゆひて。聴しめささとのや夫大功の細瑾と顧てこ
 らひらるる。些なれ事ふかろひ不孝の由を後世に遺し。ゆあ
 津根と跡めいほろかれば。鏡が助重道理をせめられて。我過り免て
 と。いふお姫の喜ひひつさうに。おりの王さまが。よはとび壁をへんかうも。なく。
 眼をうらひ姫君。この年以憂死。忍心ひんはらちも。君のこころを
 のへど。せらふ恋をせめひゆる。其甲斐めりて。今日日。今如見へ。ゆふ
 こ。日念し。あふ観音菩薩と。満重と。言光と。れる。霊の交付ふ
 と想へ。いと。さう。くも。姫。これ。か。る。目。出。夜。夢。射。中。賤。の。お。ま。ま。き。探
 か。く。も。長。物。結。ぶ。お。は。日。の。ひ。と。ま。の。日。に。ら。あ。は。心。と。ら。ち。と。る
 多くと。裁。ま。を。妹。と。一。間。と。退。ぬ。助。重。の。姫。の。ま。ま。と。り。紅。圍。ふ。れ。ハ。照。天

姫。の。恋。と。想。ひ。の。我。夫。ふ。今。夜。逢。遊。の。際。さ。ら。公。に。あ。ま。き。と。ん。び。し。く。
 顔。う。ほ。め。げ。ぞ。忍。心。同。夫。夫。の。容。貌。を。密。ふ。る。ふ。雄。偉。美。夫。夫。か。る。ま。は。
 公。裡。し。そ。ふ。お。ま。世。お。女。子。も。ま。う。は。か。る。美。夫。夫。夫。持。て。景。福
 い。こ。れ。我。身。う。ね。と。こ。ま。う。喜。び。後。は。外。音。答。の。襖。ら。ら。被。れ。巫。山。乃。夢
 を。結。ぶ。と。と。れ。ば。八。声。の。雞。ふ。ら。ら。徹。る。う。れ。れ。ゆ。お。玉。子。が。聲。し。て。山。本。の
 神。さ。ら。び。も。も。ま。あ。ま。を。か。り。あり。ゆ。ぎ。め。人。と。小。栗。を。誘。引。り。め。の。別。室。に。送
 り。ら。さ。れ。ば。十。人。の。侍。臣。も。待。ら。け。て。助。重。を。對。ひ。一。色。を。討。べ。は。謀。め。り。や。と
 同。く。助。重。別。は。移。る。く。は。術。は。只。玉。子。が。り。ひ。う。う。外。あ。ら。ん。く。と。と。わ。り
 多。め。ぞ。さ。ら。つ。一。色。が。あ。る。を。行。て。本。ま。を。遂。る。人。と。鎌。倉。に。お。ま。く。こ。し。
 止。ま。る。此。邊。に。旅。宿。せ。せ。や。と。明日。横。山。が。家。に。立。出。せ。し。此。所。と
 徘徊。さ。る。べ。た。家。や。の。れ。と。雷。ふ。こ。ふ。ま。吉。郎。と。い。ふ。り。の。あり。そ。い。家

度舟り申して旅宿さぐれば堪へぬが主従らふ旅宿して一色はまらぬ
 待たしむれまじく此処のみの横山が部下の山城申して邂逅此まらぬ
 迷ひまらぬのぞら切害して其破室を奪あつて今小栗主従陸奥
 方の商人と偽りしうと吉郎十一人の光景は奪あつて傭人たる豪傑
 たるは足らぬは東國方申すは武士の世は忍ぶがあらぬ人
 ぞんんとあつてみづりあつて下して害ごとくもなりかゝる時討ての
 動静は窺ひぬ小栗の秘して照天姫と示し合はるるあつて母叔
 人の森静くを伺ひ姫のりてに通ひたり吉郎は深くおぼろふこと
 なるは助きの照天姫のりては通ふことを知り密に小栗と横山は母
 ありしう安秀大に怒り照天の婦我子と忌嫌密夫と聞ひつゝ
 とそ申さくは後ともいふる人せしめくはれとて俄は照天の姫は

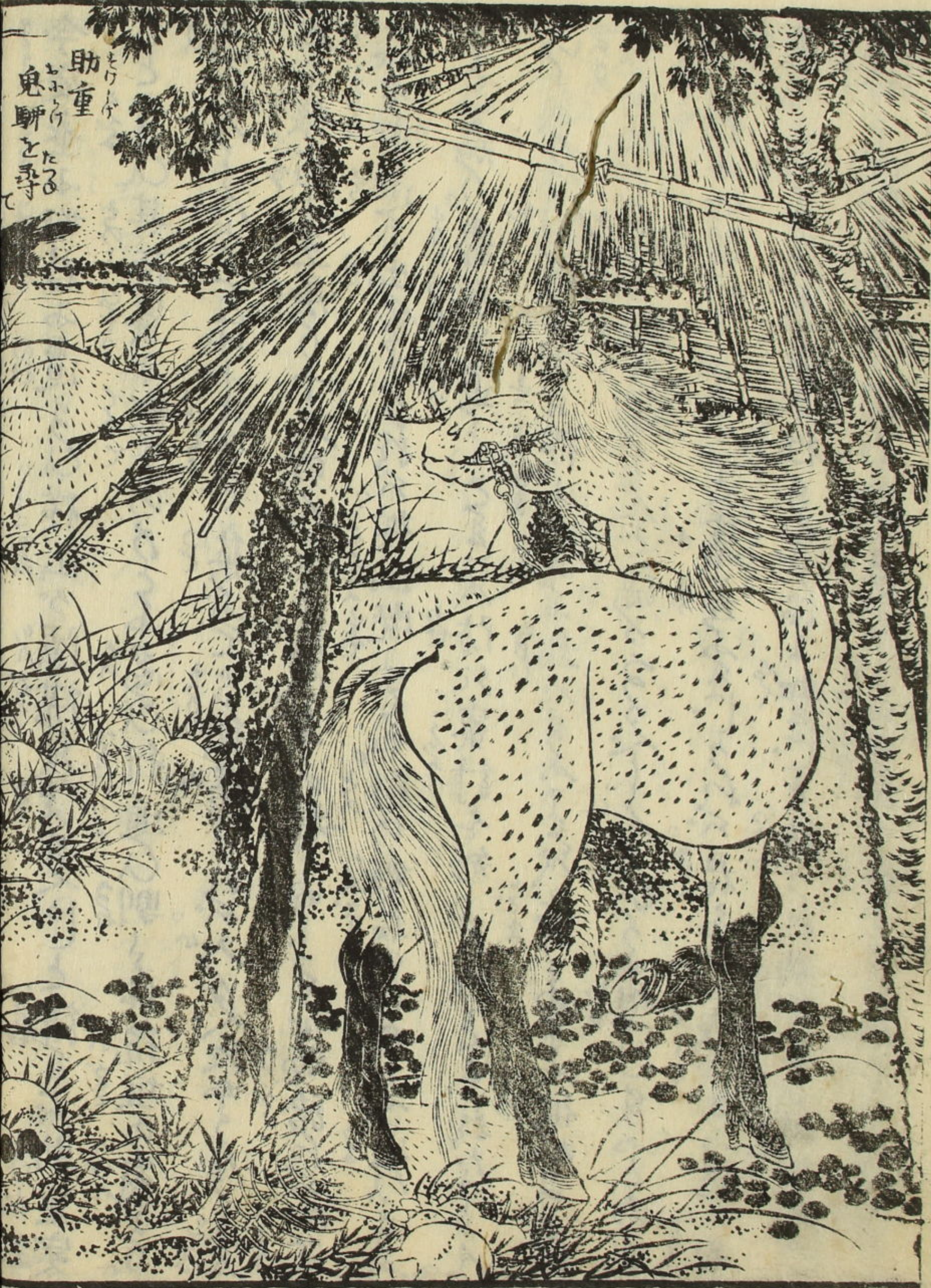
了髪を名捕強く掬向とせよ彼了髪呵責の厳きお堪へて助を始
 せりしとより夜毎刃むすむるもと詳し白は及び一は安秀叔を
 彼密夫こそ小栗助重に必定せり速に彼を討たんとせよあつたを
 吉郎誅めたるは某熟く彼們主従の群は窺ひ尋常の人とも
 おぼえと又秘して小栗主従のりてはくふりけれも終世なる豪傑なる
 はし人教を催し討たんとせよ我が方も害せしあつての多うはれ
 其上全く討たれどももつらう難なれば謀をりて討たれと速に是は
 安秀実りとおひとと奈何謀を用人と評議する処は吉郎安武進
 出で申すはこれ誅く患あるとよあつてと父が耳を口伝し何ごと
 申らん私誅は横山を拍く大に喜びて千金の謀はりのと申す日
 横山安秀自ら吉郎が許は赴たれは豫て示し合はるることなれば

主吉郎横山と助重が居る次の間は請入酒宴を催し又と真しなる
 酒既し周し及びし耐横山は酒中酔する様にて端居せしがやこ疎失
 と。助重が居る隔の紙門を開け助重と向き面を達した。横山は
 然るおびおびして小栗をえらる。はぶへうな助重をなげらふと覺ひ
 するさぬめてと珍しれ小栗は何故らぬらぬらぬと云うけられ
 て助重不審眉をたつめて横山と免着の角着のく又敬馬に爾宣る
 ところ横山夜めてはしきりうこのおびひけとてきりしてお耐まるとも
 なりたり。其耐横山云へりは其妹誓各武鳥光様死の后妹
 徒信と照天とを其妹はひ退き此地方より忍び居るらち照天や成長
 とれば豫て許嫁めれば足下のおとく送らんとも存はれと持氏公乃
 は不審と覺ししりの女見かねる昔とへ差ひ。今の奈何もやせん。

足下奴子の如根と聞つやとあらちお妹徒信不圖も世母亡きへなる
 侍も足彼の事やまきれ一日とてさるらち足下満重及のほめ氣
 を蒙りまふは。はくけあつた。この志をきり。と想ひ感ひはれが
 熟くさくさか耐耐人の信り知るの何國より忍びおとともは道て
 姫と誓婚すとてく耐耐方々と捜索をせりしうとてさらし其行態を耐を
 めりし。今日不意耐耐耐耐面をけること過世の契你と流る。しやや
 我家におきて前の約と全し一人とせばゆい。小栗は横山のあめりお
 信をうかるととてまこのう深く疑ひ急角の回意なく。さしうあひて
 居るし。衝あつて云出る直りともさく。夕の氣氣受受のころ
 家も亡びぬれらる。んんんそれとも樂中と空しく路のり餓死とる。と
 待牙の果のころおまを慥ととおほ。古け好牙と今に捨まの厚れ

あつを垂るふ心意をくこそ嬉しけれ明日を以て籠まするわりの感後次の人
 ちあんとやうは横山を以て然るが明日も。我家のほらごうのいんを
 結まわらんと云つと主吉郎に對ひ汝明日此客人を我必はひし
 且て懇小はへ並小栗を別と告てゆり去る。小栗の十人の侍臣
 任事會に云へりは我く主從忍ぶと云はれ横山とやも知り
 けるこの不思議あり彼と素より心よかぬ間なるが今のまじく
 懇意なるを云々ゆるこそを以て是れ是るの縁故あるよこそ
 さあれは彼が籠む往かしと危うくげと往さる時臆しうる人ど
 りつと入ると安念の事し横山何程のふりぞ做ん明日彼が敵は往て
 做んやうと着ぐとあるふ。十人の徒はホ一般の横山が籠む赴き
 の支へんとあるふ終ど彼を何なる謀とや置んも知らざれば

今夜蜜小姫君を遭ふ横山が隠謀を多しと誅せざる助重実
 りと肯ひ其夜蜜小照天のりふ忍び行通ひ馴は筑垣の崩より
 忍び入るとは小人妻く集るそち衛居るれ入るれやうなく空
 志く旅宿に立戻り十人の人々對ひ奉の群もく物を詰れば加茂
 吉加吉郎進と出てト多於横山既よを殿の姫君の心りと入通ひまふ
 ことを知り番兵と置くとこと防に蜜討を知るとはとされたる人
 ちあつて目め明日横山が籠む赴たふと止のふり人彼を
 兵を伏す君と討をなると謀るる人くしう想ひ多ふとある
 渾一般の加茂のやさうと露差のまじくねん君あう戒心多るべ
 虎穴に入るる兎角小往多るは如ほと誅せられ助重首を傾け志
 沈吟しとちじるるが御わつてえらく吉加吉郎が出るとは是れ差す



助重
鬼駢を尋



道分
遭

小栗助重
并人侍臣

然われ我母十人の豪傑あり。彼へ鳥合の盜賊あり。いふは猛とていふも
 恐ろしく足らぬ。明日速に横山が館に赴き其財宜しより却て横山一
 家を生捕獲敵一色詮秀とてくちびきとて術をせんぞ人々勅て
 我助とてと忿然として父の仇を誰かめて再び誅んそのもねく終ふ
 其命母よりしり鳴呼小栗助重智謀勇畧あり有りよして横山
 と慢り。加茂が誅を馳せ横山が館に至り終ふその謀計母當りれは後
 の厄難かかるとは小栗とて慢べくは古人の確言宜するはや
 斯てその翌日にありし小栗判官代助重多しく狂ひ十人の真豪傑
 太刀衣服中至るまで善とて助重不陪從横山が館に赴き
 彼方にも豫て其宿儀やとて入門迎ふ盛砂しとて清らう掃除
 きて待受たり。小栗既其門迎母到る。家長めはるは漢子出久く

正堂母はひ烟茶の餐意とて必中主横山五人の子供を引俱し出でて
 對面し我子を一。助重はひれめをこれの助重も十人の侍臣は横山
 其後横山佳酒美肴とて妻に餐意し。さて横山の
 云々。明日はへすわじとて今日昭天足下遠りし人彼を
 今父も母もな。親となるべりのは。我不肖なりといふども。照天が叔父
 なるは。及小我女兒にして強り。されば公將塔改りての見とあつる。出
 物なれもの。たてしとてわらぬ。左郎も合浪を鑊とて鞍籠と小栗
 が前へさし居たり。この以後のどく恥りし。品めめあれと尊し出
 そねり。我まこと塔よりしての引出物。望まざり。とて夢あれば助重を
 既。年経るべ。一物の時。さうねがら物。さうもれば。ともいふ

物う望まふとていふは横山うちまひ近日子供がほろり馬のゆがめまりの
 荒馬なれがふおぼへて後園の郊辺に駈ぶるを其馬の鞍おひく
 一馬場をみて入せまへこれ上とて引出物のあじこやとて助き公の裡
 あり此馬こそ故めいふ爾とも馬ぶらふあはるるが中をふおぼへて
 とらつ笑ひつゝ回意ははるこのはまの易れたふとて其馬をばらま
 える方お案内してまじとてさもなげおまりのれば横山まひ三郎や
 居る案内はかたせよとあはれ三郎安武いざまへとて前おすめ
 小栗判官代助守十人の前堂を引俱し安武が殿あつて前裁おま
 歩こと三丁をりしして一箇の門をまひの財ははる郊原の此時候
 九月の末のれは秋霧朦朧と四方ふたらしありうね枯残るは秋や
 の風お音まらる憐れとてまゝくまへり此府に郎安武通は指はきて

對ひお入へては細流お添はる森こそ彼馬を駈ぶるまへし彼所
 まても案内しつゝおまらるるれと馬場のりけともせんとてその
 より人々彼所へおませよと云はれ慌忙けお走りまね小栗主従目と
 目を見合し三郎が案内するまゝをほげれや此馬子細を有ん
 かまらばゆてよとのりるお入りの命までもおらる此馬お望んで
 る不足とてりけいんと互ふらるる一筋の生茂のる萱野を分て
 るらり行既事既近くするは秋風の凄然とてあつれ千草まて
 虫の音のそれらあはれ哀しげおまらるりのこそありり主従四方
 と歌お玉耳をそむてて寝て笑けがふく人れ呻く声ありこそま
 と其声お知る人お歩行は歩し呻声の近くあるお其辺の白骨田お
 とて砂石のこじら従これとて怪しきまらるくこの斬罪とて

場あやと丈あのみる萱あーこけて四方とるるあ死して幾日もうね
 とおろしれが弄散せはうとくまらび居る。それが中も三つは小
 に綁められ六十あまりの漢子ありいと瘦瘠く顔も炭のよう
 と思われが若くは呻れ居れり助重とれが池庄司とて録故
 を同くしゆ彼浄子若く息が衝とまうしはあ我が同くしゆあ
 方と奈何ある人もくはうとくは庄司今此あはほうとて
 のら小栗判官代助きと従るる汝が身の上りしてとくお解めれ
 はるるゆを語り少くと。われ彼漢子いと驚きしは風情を首次
 りてげ助をを着一着てりまき。君の其あまの部りあまらるる
 系も君あよく知とり斯まらるとりあ名武たる光の下僕と道助
 とやと考あてけりぬ前年うく言光相換川を横死の初り某

供あてひはけり。さても主人篤光の水死と横山が正あめてくさるる
 其府のうへ爾とくくひまきと篤光横死の府の光景を詳らふの
 某もその府川からちひれぬはを幸ひ水心次はこれ水の中ら
 さまれとせまき。水の底次泳り幸じて命助とる。主の死さる
 とんながらのあく館へ還るる身に分疏まがく。生國武をる國
 金澤なれ彼更とも退忍び居るらち忽ち主家とひ内君も姫君
 もその行を知らざればいと去赴のあり人も在家知れぬ詮と入
 形く勢府故郷ありける。熟く想を下郎と云ながらうの窓
 船を目のあより。をけこのまき止るる。せめては能く横山と
 内君や姫君も告すわらせんと故郷をまきわく方主のゆくへ
 尋ね巡るとかひあ知れぬ下まが故郷へ還ると此地方あまじお

といと若くは物流終らむとばかりなり。小栗の道助があかしの最
 初を憐みしやうの事へ物流を馳せしむるはかたき心で思はれ
 笑て云へり。わが呼愚なる安秀は我徳角の其むじを武が館に
 おねて彼と弓法を争ひ論じし。我上にお出ると社にせしめし
 志て我は能く懐く。されが今不圖此事よき事と幸ひ。昔の怨は
 報んとせばあべ。どひもせむ。横山の舅の敵。赤子の仇は。ま
 此老賊を殺さむやるといふまけ。池庄司と初め。風間田。美登の。仇を
 を揚り腕を摩つて。悪ん横山が。行状。お命の。早く。この老賊を除け
 るへと。お母の。か。加。友。兄。お。これ。を。止め。君。を。じ。め。人。を。れ。傍。り。の。さ。る
 こと。お。が。ら。君。の。天。天。俱。お。せ。ざる。の。仇。の。り。それ。も。討。を。私。の。仇。と。先。お
 志。の。あ。は。是。何。の。道。理。ぞ。や。今。横。山。が。光。景。を。害。す。る。は。部。下。已。ま。後。し

善過失あつた一色とい誰うけて大殿の修羅を安んぶも人たすの
 前の小栗の突飛の爲に千金の幣の發せんとす。さげやいと。跡を
 小栗此跡を馳せ。やうやく其憤をおさる。雨のれ一旦横山は鬼駢
 象んと約せむ。此事おじ。おの。と。再。び。草。紙。あ。み。り。た。て。既。乃
 あお。到。て。其。光。景。お。さ。る。太。中。の。柱。を。蜘蛛。十。文字。お。み。足。を
 大。螞。蝗。絆。り。て。打。け。け。る。林。奴。所。お。は。し。く。幾。お。人。の。出入。を。は。ど。り。の
 扉。あり。堅。く。貫。木。を。鎖。せ。り。蜘蛛。の。隙。より。裡。を。窺。ふ。お。八。寸。の。く。し。こ。え
 の。は。太。く。違。し。お。駢。なる。馬。の。り。髪。も。鬚。も。生。か。ら。り。て。形。も。定
 り。あ。え。之。結。ど。眼。も。と。く。見。く。して。乱。し。髪。の。際。より。人。お。こ。る。ま。ま。は
 閃。く。して。電。光。の。こ。し。尾。の。長。く。して。身。丈。お。あ。り。太。に。鉄。の。鎖。を。以
 四方へ。引。け。り。鞍。お。た。は。が。只。今。人。を。れ。ま。る。を。え。例。の。人。林。を。う。と。お。ひ



助重 魚野

鞭馬術の
妙と宗を



うちを寛くしてあやせぬふこさうかと思ふくし入とさあな
さめても馬場のりつめも整ひて足まじりまじり
しつゝ入とて馬場ふ案内し父の安秀が斯と告げれば横山安秀が案
相違し頼まきつゝ鬼駟をいと易くあはれりるこそ不思議な事
再のれ素鬼神よもあはれ其術をそさし仕括して馬を食て
と子供五人引俱し馬場よ出され助重安秀が死んでるより下
一乳して下つた糸切まじり馬を好む此年以常陸に居つた大筋
の馬とも多くあはれしと此鬼駟がごとくあはれりて天晴の良馬よ
をぶあとのりつめは安秀のあはれ後といふは多し難しうち
笑ていへりける前刻もすはれり此馬入りけるは馬場よあはれ
なればさこそ結のゆめと乞求めをへりしといふと猛くして流るる

好む寛くし概ね駟があはれしはつた足下斯むり容易きあはれ
こと實にお其人をほつりつとすはれり足此馬の結ともてんてん天晴
足下の馬道の聖人あはれもあはれりつたあはれ此馬よせせやと其益
もあはれり乗してせせりひさしやとえられが小栗心裡彼我の難事
を云うけ疎失させん謀まり悪事も悪しと念はれり完示と打突
某爾の戦ふのころ足下をばはするも後ど横山及のめまのあはれ
せん風情あり。そのあはれりるが免れ終へと回意され安秀速なる事
さびしき堪へり。そのあはれりるが對ひ早く準備仕まつれと下知され
心ほめと回意してま去るあはれりるが材子。其益盤とを推入馬場中
央あはれりる小栗よあはれりるが材子。其益盤とを推入馬場中
材子持いと云下義のぬと池庄司はと出て二丈あはれりる材子

して野に打ちて馬場の東詰に押建する。其光景仁王を造り扱じ
 うはがごとく。勇ましくおそるべし。げんごんごんごん。小栗とことごと
 くて鬼駢みらち。馬場を西詰する。静うおまかせ。馬の西詰めて。
 三四回輪をめぐり。一鞭撃よと着へ。馬の平身ぶらり。東に於て
 馳せり。其迅こと矢より。や。庄司助長が持つ。木枝子を走せ
 昇る。こと。平地を行が。じ。め。や。庄司樹子を持つ。堪はし。と着
 些も動くと。地より生ずる。ごとく。左目。紅色をまど。るとは。小栗
 と馬。扱扱。小栗より。上手。綱をゆる。扇をま。つ。勢。所。休。と。静
 と。糸。下。せ。が。らの。光。景。を。こ。ん。居。る。程。の。り。の。小。栗。が。馬。術。庄。司。が。勇。力
 世。も。少。な。が。事。な。ら。が。咳。然。と。して。歎。賞。せ。り。横。山。の。小。栗。主。従
 が。武。威。と。して。心。裡。に。驚。る。れ。処。で。我。力。を。り。て。討。多。ん。こと。難。

心と尚鬼駢を扱て想へ。小栗が術助長が勇力を賞し。其
 其。盤。の。こ。の。望。め。ら。即。重。辞。ま。じ。て。又。鬼。駢。と。歩。ま。せ。其。基。盤。の
 り。と。お。近。げ。も。盤。の。上。へ。馬。の。四。足。を。上。せ。る。盤。中。に。あ。り。る。と。は。次
 小栗。手。綱。を。か。ひ。り。て。馬。が。踏。く。せ。う。お。ふ。た。が。跡。の。蹄。の。こ。も。も。盤
 の。上。お。ま。よ。め。が。り。三。回。ま。り。て。盤。の。四。方。に。あ。り。る。其。光。景。人。間。世
 へ。さ。げ。れ。が。え。物。の。人。と。舌。を。巻。賞。瀆。せ。ら。れ。と。の。り。る。

小栗外傳卷之五終

